共に育つ

こどものひろば

since 1999

発行　2023年8月
特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば

〒607-8072
京都市山科区音羽伊勢宿町33番地77
Tel　075-591-0877
Mail　kodohiro@gmail.com

応援お願いします！

2022年度

子どもの貧困対策事業報告書

特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば

「子どもの声が届くまち」へ

山科醍醐こどものひろばの子どもの貧困対策事業へ、温かなお心とご支援をいただき、心より感謝申し上げます。この報告書は、私たちの大切な活動を通じて得られた気づきや課題をみなさんと共有し、これから共に子どもの貧困解決に取り組んでいければと、お届けしております。

この1年の活動のなかで、子どもたちは多くの声をサポーターやスタッフに届けてくれました。その声はもちろん言葉だけでなく、行動でも表現してくれるのですが、その表現を受け取れる距離に私たちが「いる」ことが大事なのだなとあらためて再確認しました。また活動が多岐で、長期的である特徴をもつこの事業では、「今伝えたいこと」もあれば、数年たって「今だから伝えられること」、これからいつか「伝えたいと思っていること」といった子どものタイミングで声が出てくることも多々あります。そんな子どもの声が出てくるタイミングで子どもの前に伝えたい相手、場所、環境があってはじめて、「声が届く」ようになります。もちろん声が届くということは、声を出したいということであり、声をだしてもよいと思えたからです。子どもの声を聞くことが注目されていますが、そのために私たちができることは何であるのか私たちの活動から少しでも伝われば幸いです。

また前年度の報告書から子どもの貧困対策事業の10年間を振り返ることも取り組みはじめています。今回もこれまでを少し振り返りながら、次のアクションに向けた議論につなげていければと考えています。こども家庭庁ができ、子どもを取り巻く環境が変わろうとしているこのタイミングだからこそ、地域で市民が何ができるのか、あらためて考え取り組んでいきたいと、考えておりますので、どうぞこれからも、温かいご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2023年8月吉日
特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば
子どもの貧困対策事業スタッフ一同

山科醍醐こどものひろばのミッション

地域に住むすべての子どもたちが、心豊かに育つことをめざし、
地域の社会環境・文化環境がより良くなることを大きな目的として、活動しています。

子どもと大人が一緒になってものごとに真剣に向き合うことで、
“共に育ちあいたい”との願いを大切にして日々取り組んでいます。

あらゆる人にとって、自分らしく生きることのできる、人との交わりを大切にします。

子どもの貧困対策事業とは

地域の子どもの豊かな育ちを応援する中で、集団で過ごすことが苦手だったり、学校に行くことができてないないという子どもや家庭の声から、2005年より個別サポート事業「楽習サポートのびのび」という活動がうまれました。この活動を続けていく中で、経済的困窮を理由に体験活動への参加費が払えないなどの声も聞こえ始め、子どもたちの困ったを解決するための事業として2010年に「子どもの貧困対策事業」がスタートしました。現在では「暮らし・学習・余暇」という3つのサポート活動を軸に、一人ひとりの子どもの「やってみたい」に合わせた形で活動をしています。

日常生活を過ごす活動に加えて、活動の枠を超えて関わってくださった2名の方から文章を寄せていただきました。

同窓会

子どもたちの夏休みに、当時僕が参加していた活動の同窓会があり、久しぶりにみんなで集まりました。

「同窓会やるのできてください」って声がかかって「懐かしいなぁ」と思い、参加をしました。5年ぶりに当時の子どもたちとサポーターに会いました。子どものうちの一人からは、第一声「うわ！おる！」と声をかけらました。顔ぶれと事務所を見て本当に懐かしかったことが印象的でした。

子どもたちの中には当時から環境が不安定な子がいたので、「今何をしているか」と心配でしたが、その子と話すなかで、大学で就活が始まっていると聞くと「頑張ってるんやな」「もうそんな歳か」と感じました。
現在も状況が安定はしていなかったけどそんななかでも、その子らしく頑張っていることを聞けて、嬉しかったし自分も逆に勇気をもらえました。

また、当時参加者だった子どもたちが、今や中学生を支えるサポートの立場になっていることもそうだし、サポーターじゃなくてもこうやって定期的に声かけたら顔を出してくれること自体が嬉しかったです。

こういった関係性、つながりがあることが、彼らにとって「この活動が居場所」として機能していたり、安心してまた来られる場所になってたんじゃないかと思いました。この活動を介して他のサポーターや子どもたちと繋がれたことが僕にとっても居場所であり安心できる場所になっていることを再認識しました。

同窓会に参加してみて感じたのは「会いたいと思ったから会う」だけでなく「定期的につながりやお互いの状況を知り合える機会」なんだなと思いました。

それは子どもの時の活動だけではなく、その先もいつでも帰って来られて、みんながしたいことをして過ごせる場所があることを再認識でき、子どももサポーターもこれからの支えになっているのではないかと思います。

語り手
たくと
2017年から2018年まで、山科醍醐こどものひろばの職員として当事業の活動を担当し、子どもたちに関わる。現在はヤングケアラーの支援スタッフやコッペパンにコラムを掲載している。

保健室から

学校現場で子どもたちと接していると、様々な環境の中で、懸命に生きている子どもたちと出会うことがあります。その子どもたちをありのまま受け入れ、存在そのものを肯定する力が「山科醍醐こどものひろば」にはあります。

こどものひろばを訪れる子どもたちにとって、スタッフの方々と過ごす時間がどれほど大切なものになっているか、その生き生きとした表情から感じとることができます。学習はもちろんのこと、成長に関わる細やかな部分を一人ひとりに寄り添ってサポートしていただいているこの場所は、地域の中で生きる子どもたちにとって、「安心できる居場所」になっているのだと思います。大切に関わってもらった経験や温かい気持ちになった経験を積み重ねることで、子どもたちは投げやりな気持ちになっていてもまた、希望を持って自分の足で歩き始めることができます。

私が学校で関わっていた子どもを修学旅行に引率した時のことです。自由時間になったとたん、真っ先に「こどものひろばの皆にお土産を買いたい」とお土産を買ったことがありました。大好きな人たちにお土産を渡す…その思いは「人に大切にしてもらったから自分も人を大切にする」ということであり、これから生きていくために必要な土台をこどものひろばの皆さんに作っていただいたのだと胸がいっぱいになったことがありました。

地域・家庭・学校が一緒になって子どもたちを育むことは、地域の大きな力になっていくことと思います。今後もそれぞれの立場から協力し合い、子どもたちが一人残らず幸せになっていってくれるために手を取り合っていけたら幸いです。

語り手
養護の先生
公立中学校の養護教諭。日頃から生徒に関わる中で、家庭環境が不安定な子どもに寄り添ったサポートを行う。学校外での対応が必要な子どもに対しては、当事業に繋ぐなど、連携して支援に関わる。

2022年度の活動報告

2022年度は、1,012,000円のご寄付をいただき、のべ379回の活動ができました。

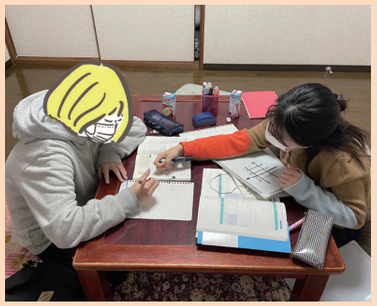
1. 暮らしサポート

平日の17時から21時に、あそび・夕食・入浴など、日常的な生活をサポーターと一緒に過ごす活動です。子どもの生活に合わせて日中に実施することもあります。年に数回の宿泊活動もあります。

また拠点へ来られない不登校や引きこもりの子どもに対してはアウトリーチ活動として家庭訪問を行っています。

活動回数　218回
活動参加人数　259人

2. 学習サポート



平日の120分、サポーターと一緒にマンツーマンで勉強する活動です。わからないところを一緒に考えたり、勉強方法を模索したりします。宿題や復習以外にも、息抜きにゲームをしておしゃべりする時間もあります。

それぞれが勉強したいことを勉強しつつ、いろんな大人との出会いや、人との交流も大切にする活動です。

活動回数　151回
活動参加人数　433人
※中学生学習会の活動も含まれます

3. 余暇サポート

土日を中心に、スポーツや体験活動、地域イベントに参加して休日を過ごす活動です。地域のいろんな人の力をお借りして、日々の生活や活動ではできないことにサポーターと一緒にチャレンジしています。普段よりもじっくり時間を過ごすことができるため、それまでできなかった話を深められたり、小さな願いを叶える機会になったりします。

活動回数　10回
活動参加人数　22人

ここでは活動の様子をダイジェストでお伝えします。

悩み続けた1年間

「勉強、むり」、自己紹介の時に多く聞く言葉です。学校生活がある以上、どれだけ嫌でも勉強を避け続けるのは難しく、「少しでも勉強と向き合うことができれば」と背中を押してもらって来る子どももいます。とはいえ、自分自身が出せる場として、子どもと一緒に活動を作りたいという思いのあるこの活動では、無理に勉強をさせることはできません。

2022年度は7名の受験生が活動に参加していました。勉強よりも先に、自分を大切にできたり、もっと人との関わりや日々の暮らしを楽しめるようになってほしいと願ってしまいたくなる子どもたちでした。避けられない勉強と、豊かに育ってほしい願い。その両立を毎回の活動でずっと悩んでいました。

迎える受験。お金の支度や、早起き、間違えず目的地に着くこと、気持ちの整理…乗り越えなければいけない壁が山ほどあります。子どもたちとも、受験という一大イベントをどう乗り越えるか、一緒に悩みました。

「あの時の花火、楽しかった…。」受験が終わり、活動での卒業式。サポーターが徹夜して作った色紙を見て、これまで過ごした活動の時間を振り返ります。一人ひとりにとって、たった一度きりの中学校生活。2度と来ない今を重ねて、それぞれの道を歩み始めた時、一緒に悩んだこと、楽しかった時間が少しでも力になってほしいと願っています。

卒業生

2022年度は、例年以上に卒業生が多く関わってくれた年でもありました。活動を卒業した高校生が、「ちょっと今勉強に困っていて行ってもいいですか？」「久しぶりに会いに来ました！」「差し入れ買ってきた！」と、理由はさまざまですが、顔を出してくれたのがありがたい限りです。

季節企画

七夕、流しそうめん、ハロウィン、クリスマス、節分、卒業式、誕生日会…季節それぞれのイベントを2022年度も活動の中で実施することができました。ひろばの会員さんやお寺からからいただいたお野菜を季節の料理にして味わったり、デザートとして映え料理にチャレンジしたりしました。サポーターだけでなく、連携先のボランティアさんの力もあり、コロナ禍にもかかわらず、コロナ前の季節行事に負けない楽しい時間が過ごせたかと思います。

NEXT PAGE!

サポーターインタビュー

関わりを重ねる

大学1年生の時に、サポーターになり、大学卒業まで活動してくれました。そんなともぞうに、活動を振り返ってもらいながら「出会った子どもたちと過ごした時間はどんな時間だったか」をインタビューしてみました。

子どもとの関わり

Q）４年間の活動で出会った子どもの第一印象を教えてください。

何人かの子どもに関わってきましたが、ある一人の子は最初誰に対しても丁寧語を喋っていて、ちょっとだけ人に対して壁を作っているのかな、という印象を抱きました。話す中で「友達の話はでてこないな、大丈夫かな。ちょっと学校で浮いてないかな」と思いました。

一方でゲームの話になるとたくさん喋ってくれるので自分が夢中になっていることをとにかく話したい性格なのかなと思いました。それは今も変わらないですね。

Q）活動中は、何をしていましたか？

活動中は一緒にボードゲームをしたり、ご飯を作って食べたりしましたが、一番はその子のしているゲームの話を聞く、というのが主でしたね。その子自身がゲームをしていて「自分一人でたくさんのプレイヤーを倒した」というその子の武勇伝みたいなものをよく聞いていました。

変化

Q）最初と比べて今の子どもの様子はどうでしょう？

今はなんかちょっと友達もできてきたみたいな話も出てくるようになってきました。ゲーム以外にもちょっと話してくれることが増えたかなと思います。

活動開始の時「ひろばで食事だけでなくお風呂に入ってほしい」って要望があったけど、子ども自身はあまりお風呂に入りたがらない性格だったようなんです。だから気持ちを尊重して無理には入らせずその子のやりたい活動をしていました。

数年ほど僕らと一緒に活動をして、ある夏休みの時にお泊まり会を開いたんですね。その時に抵抗なくお風呂に入ったっていうこともありました。

あとは、その子自身最初に人と壁を作っているような印象だったんですけど、活動を通していろんなサポーターと関わっていていく中で、その子自身、初対面の人に関われるようになっていって、前よりも分け隔てなく、初めての人とのコミュニケーションをうまく取れるようになったんじゃないかなって印象があります。

こんなことがあった中で、本人の中で僕らは特にそんな大して変化を与えたかどうかわかんない…けどなんか本人の中でなにかあったんかなっていうことを、ずっとみていて感じましたね。

活動の意味

Q）ともぞうが4年間の活動経験を通して、子どもたちと共に楽しい時間を過ごしたことは子どもたちにとってどういう意味を持つと思いますか？

子どもたちは基本的に同年代の子どもたちとコミュニケーションをとるのですが、この活動では年代の異なる大人と話すわけです。例えば身近にいる大人が自分と一緒に遊んでくれて、一緒に活動する機会って多くはないと思います。

僕らサポーターは大人の分類に入ると思うんですけど、子どもたちと一緒に遊んだり、一緒に何か食べて雑談したりっていうことをする中で、子どもたちにとって「こういう大人もいるんだ」っていうことを経験できるっていう意味でその子にとって良い機会になるかなって思いました。

あとは将来大人になった時にどういう人になりたいかっていうことの選択肢が増えるかもしれないという点で意味があるんじゃないかなと思います。

子ども時代はどうしてもやっぱり近くにいる人間、近くにいる大人の影響を受けがちだと思います。例えば親が自営業だったら自ずと自分も継がないといけない、とか大人が「勉強しないと生きていけないぞ」みたいなことを言うと、自然と視野が狭くなってしまったり…。

こういう活動を通していろんな役割をしている大人がいるっていうのを見る機会があることによって、将来どういう大人になるかっていう選択肢を増やせて、結果的に彼らが以前よりちょっとだけ自由に生きることができたらいいなと思っています。

共感

Q）４年間活動を続けてきて、活動への共感や大事な点はありますか？

「学校や家以外の場所を作るっていう点」でちょっと共感したのかなって思っています。

小中学生の頃って、やっぱり学校や家だけが彼らの世界のすべてっていうか、そういうふうに思いがちなんですけど、その中でうまくいく子もいればいかない子もいるわけじゃないですか。

別に学校や家だけがすべてじゃないし、それ以外にもいろんな世界があって、いろんな人がいるんだなって、今の環境がすべてではないよっていうことを子どもたちが感じることができる活動が、実際僕が子どものときにあったらよかったなって思いました。

ゆるく

Q）ボランティアとして関わり、自分の中で変わったことはありましたか？

最初はボランティアだから結構固く真面目にやるのかなって思ってました。実際活動をやってみて、子どもたちと向き合うのに「そんなに気を負う必要はない、固くやる必要はない」って感じて「自分はこういう人間だよ」っていうのを出しつつ、やっていくことが大事だなって思いました。

ゆるくやっていってもいいんだなって。子どもがどうしたいかとか、あくまでも子どもが主役だよねっていう考えのもと活動をやっていればおのずと「この活動の軸」みたいなものが自分の中に出来るんじゃないかなと思いました。

語り手
ともぞう
2019年に短期のインターン生として子どもの貧困について学ぶ。その後もボランティアとして4年間継続的に活動に参加。

寄付サポーターインタビュー

ひろばと出会って

山科で生まれ育ち、地元企業の経営者でもある岡武さんに「寄付を通して見てきた子どもたちの姿」についてお話しを聞きました。

ひろばとの関わり

ひろばと関わったきっかけは私の所属する京都東山ロータリークラブで一緒に活動をさせていただいたことからです。その時から関係はできていましたが、この事業を知ったきっかけはひろばが書いた「こどもたちとつくるひとりぼっちのないまち」を読んだ時です。たまたま本屋さんで見つけて「こんな良い事業をしている団体だったんだ」と本当にびっくりしました。

有限会社OSSは、先代である父の前職が私立学校の教員で、その関係で独立した後も教員の方々に応援してもらったこともあって、その恩返しをしたいということで「OSS奨学金」というものを制度として80年代から提供してきました。

ひろばと出会う前はその学校関係者からの推薦、あるいは東日本大震災で福島から一時的に京都、滋賀に避難してきた子どもたちに提供してきました。ちょうど、その子どもたちへの提供が終わった頃、本をきっかけにひろばの事業を知って「こんなことをやっているのか」と思い、今後はここへ提供することを決めました。父が始めたきっかけは、教員をやっていた時に「自分の責任じゃないのに学費のことで転校しないといけない、退学しないといけない、そういう子どもを少しでも減らしたい」という思いからでした。

語り手
岡武 和暁
山科にある保険代理店「有限会社OSS」の代表取締役。現在寄付者としてひろばに関わる。

僕の思いとしては、経済的な問題で進路を諦めたり、途中で学校を辞めたりっていう子どもを減らしたいとの父の思いを引き継ぎ、「この地域でこんな良い活動をしているところがあるなら、ここに出したい」ということで、ひろばにOSS奨学金を提供しています。

また奨学金のもともとの制度にも疑問がありました。「成績が良くないとダメ」とか「親の所得が今年はなくなったけど、前年はあったから無理」とか各家庭の持つ背景には目を向けてくれません。公平感という意味ではわからなくはないんですが、奨学金本来の制度だったら、学力だったり、親の所得だったりっていうのを取っ払って、めんどくさいことはやめて、困っている人にすぐに出してあげたいと思っています。

経済格差による教育格差を感じる

実際に私立小学校がどんどんできていて、お金持ちが行く学校が地域から偏ってるように感じます。どこどこの校区に行きたいとか教育附属のあの辺はやっぱり人気が高いとか、親の所得や貧富の差を感じます。

大学生の半分が奨学金を借りていて、平均借入額が300万円にもなり、月1万返していっても25年かかる。そうすると教育にお金をかけられる人（大学に行く、塾に行く、進学校に行く、一貫校に行くなど）と、お金をかけられない人が出てきます。社会をみていると教育にお金をかけざるを得ない社会だと思いますが…。

そんな社会の中で、頑張ってる地域の子どもたちがいるんだっていうのを、もっとみんな知ってよ、と思います。

みんなに知ってほしい

自分の暮らしている生活圏内や、全国で困っている子どもたちが実際にたくさんいるんだなということを改めて思い知りました。新聞やテレビで見てるだけではわからないですね。

実際に関わって、いろんなハンディを背負いながらも学校行きたいんや、勉強したいんやと思ってる子どもたちがいて、それをひろばや行政機関の人たち、心温かい人達のおかげで踏ん張れてるという実態をまず世の中が知らないといけない。現状を分かってない人が今の社会の仕組みを作ってるから、子どもたちの状況は本当の意味で変わっていかない。だからこそ国任せ・人任せ・誰か任せではなく、みんなにもっともっと知ってほしいなと思います。

だからひろばは素晴らしい活動してることに自信を持ってください。僕らでもそうなんやけど淡々とした報告じゃなくてどっかでいろんな業種が参加できる「自慢できる全国大会」とか「うちこんなやってます」みたいな自慢大会とかやりたいですね。

ビジネスと非営利活動の共通点

ひろばと関わる中で、ビジネスでも非営利活動でも共通していることが何点かあります。一つ目は相手のことを想える「共感力・想像力」だと思います。

実は僕も不登校で、小2なんかはほとんど学校に行ってなかったです。だけど小3の頃にいい先生に当たったことがとてもラッキーで、学校に行くようになりました。やっぱり子どもたちは先生を見抜いていて、自分に共感してくれることを感じられる、相手の立場に立って想像できる力がある人っていうのを見ているし、子どもたちも好きですよね。

二つ目は、「楽しい」ってことだと思います。営利企業をみていてもどこかおもしろくないんです。会社だからもちろん営利は大事なんですけど「営利とか効率とかスピードとかだけじゃないんじゃないの」って思っています。

会社も面白くなかったら続けられないし、実際しんどくなっている人がいっぱいいます。あくまで勝ち負けとかではないフラットな立ち位置で人と接することが大事なんだと思います。あとは「みんなが一緒に幸せだったらいいやん」って。それはたとえ相手が子どもであっても当たり前だし、会社も非営利活動もやっぱり面白い方がいい。だから「楽しい」っていうのはキーワードなんですよね。

三つ目は、効率を求めない結果として「時間がかかること」です。すぐに結果が出るぐらいだったら誰も困ってないんです。子どもも5年10年とその生活がずっと続く中で成長するし1日2日でなんか変わるわけないんです。だから「時間とエネルギー」は特にかかるものだと思っています。

インタビューを終えて

今回のインタビューの中で、「少ないリソースで争ったり、効率化を図ろうとした結果が今の現状だと思う」「子どもは社会の未来だから」と話していたことが印象に残りました。

これからさらにもっと子どもたちの置かれている現状をいろんな知ってもらい一緒に考え、今回のように立場を超えてこの課題に取り組んでいきたいと思います。

前理事長インタビュー

村井さんからみたこの10年間の子どもの貧困対策事業について質問をぶつけてみました

村井さんがこの10年間、理事長としてみてきた「子どもの貧困対策事業」について、スタッフが聞きたいことをぶつけてみました。

取り巻く環境の変化

Q）子どもの貧困対策の推進に関する法律ができて10年ですが、子どもを取り巻く環境はなにか変わりましたか？

私たちが活動する中で、地域においては子どもに対する意識がこれまで以上に高まり、この10年でさらに新しいチャレンジをされる方々の姿をたくさん見るようになりました。また気になる子どもや家庭があると相談をしてくれることも増えました。

一方で、地域の活動や子どもに関わる方の数が増え、あらたな手立ても生まれましたが、それ以上に社会そのものが大きく変化したことによって（コロナ禍や物価高騰等）問題が解決する前に、新たな問題が生まれることになりました。その結果、従来の子どもの貧困状態にあわせて、これまで以上に社会の仕組みや制度では解決できないことが増え、全体的に10年前より悪化していると感じます。

さらに、この10年間で活動を卒業していった子ども一人ひとりの状況を見れば、改善していることもあります。しかし家庭そのものの経済状況は改善に至っていないことや、経済的困窮の原因が親の病気や怪我などによるものだと、症状が悪化していることもあり、地域のボランティアだけで支えることは難しい状況にあります。

語り手

村井 琢哉

子ども時代に前身団体である親子劇場の活動に参加。キャンプリーダーや運営スタッフとして関わり、理事、事務局長を経て、2013年より10年間理事長を務める。

地域のなかの活動では、支援・連携・寄付の面で年々意識が変わっている実感がありますが、目の前の子どもたちの経済的困窮の原因は変わらないなかで「本当にこれでいいのだろうか」と感じながら日々活動している人も多いのではないかと思います。そういった状況の中では公的な支援の持つ役割は大きいのではないかと思っています。

また社会環境の変化で大きいのは、活動始めた頃は多くなかったスマホが普及することで、SNSのトラブルも増えました。そもそも「携帯を持たないといけない」という状況も当時はなかったのですが、コロナでオンライン授業もあるので、結局お金がよりかかる状況が自然と生まれているし、お金がないから持ちません、とはならない状況に変化してきました。生きているだけでお金がかかる社会がより強化された感じです。

活動の変化

Q）この10年間で当事業はどのように活動を変えていったのでしょうか？

こどものひろばがこの事業を始めた頃は、全国でも子どもの貧困対策事業が少なかったので、子どもたちとの個別活動をしながら、まずは社会的な認知を高める動きや、公的制度を変えていく動きを主にしていました。

そこから、地域で子どもたちに目を向けてくれた方々と一緒にコミュニケーションをとって一緒に学び合いながら「何ができるか」と考え、いろんなチャレンジをしていくフェーズに変わっていったように思います。

Q）応援してくださる方々はいかがですか？

全国から子どもの貧困に関心がある方の寄付にプラスして、地域の方々からのボランティア参加や本、物品、野菜、漫画での支援などをいただけることも増え、顔の見えるの関わりが増えていきました。

地域の変化

Q）地域連携はどう変わってきましたか？

子どもたちが暮らす学区によって状況が違います。私たちの拠点は3拠点しかありませんが、子どもが自力で通える範囲に活動場所が必要と考えているため、必然的に地域の方々に相談させていただいて、地域の自治会の方やいろんな活動をされている方や私たちの従来の会員さんのネットワークに支えてもらいました。またその逆で、地域から一緒にできないかというところからはじまった連携も生まれてきました。そして現在は学校運営協議会や要保護児童対策地域協議会などのいろんな会議にも参画するようになりました。

地域連携は、私たちの都合だけじゃなくて「子どもたちにとってどうなのか」「私たちがどんなことができそうか」「地域の方々が子どもたちにとってどのような思いをお持ちなのか」の3者の思いが重なったところで実施できていると思っています。

そんなふうに毎回議論をしているからこそ、もちろん揉めることもありますが、それはちゃんと子どものことを考えてしっかりとやり続けることの「健全さ」があるからこそだと思っています。

また、子どもの貧困対策事業として、目に見える食事提供や学習支援といった活動に比べて、事前に各関係機関とコミュニケーションをとったり環境調整したりと「黒子」として動いている時間は大きいように思います。それは本来事業をやり遂げるためには必ず必要なことです。

そうやって地域に必要なコミュニケーションは広がりに比例して増えていきました。

原点

Q）そもそも、この事業の原点はなんでしょうか？

もともと団体として「まちの魅力に触れる」「楽しい体験をする」「自分たちの思いを表現する」「多世代で溢れんばかりの人たちとの関わり」を充実させていくことを子どもたちと一緒にやることを目指してきたし、楽しみながら笑いながら過ごせるまちや活動を目指してきました。

ではなぜそんな私たちが子どもの貧困対策やっているかというと、「その活動に参加できない子がいるよね」というただそれだけなんです。「貧困がなくなればいい」がゴールではなく、その上で活動を通した後に、子どもたちと一緒に笑えるかとか、子どもたちがやりたいことをやれているかにつながらないといけないと思っています。

活動をしたくても、参加費っていう壁があったり、持ち物がうまく揃えられなかったり、お迎えができないといった状況がありました。ただ笑って活動するだけなのに実はそれをするのにこの社会はいろんな条件が必要であってその際たるものが「お金」であり、ただ生きていくだけでお金がかかります。そして人は生きていくのに文化や娯楽も必要なのに、優先順位がすごい下げられてしまいがちです。

私たちの原点は子どもの権利の中で「遊ぶ、休む」というものもあるのに、現代ではそれにもお金がかかり結果としていろんなことをたくさん諦めてしまう現状に対して「できることはないだろうか」「誰もが参加できるってどういうこと？」ということでした。そうした、たった数件の相談から「見守り」以上のことをやったほうがいいということで、始まった事業でした。

専門性

Q）この事業の中でひろばらしい専門性とその役割はなんですか？

日々子どもたちと関わっていたとしても地域の方々は「見守り」以上のことができない状況も多く、また地域活動の中に専門性を持った人が必ずいるわけではありません。そのため計画的、確実性の高い支援が地域の中で充分にできているとは思えません。

そういった時に、活動のプログラム内容自体も大事だけど、それよりも地域の方々が自由なコミュニケーションをとっても、効果が出るような「環境調整」に私たちの専門性を発揮しないといけないと思っています。

たとえば子どもの事情（発達、コミュニケーション等）について、現場の人やボランティアがすべてを学びきれるかと言われたら難しいし、さまざまな状況判断ができません。

そのため、地域側に子どもの専門的な眼差しを持った人を配置することも役目の一つであると思っています。私たちは、その中間的な機能として専門性と非専門性の両方をもった、地域でテーマ型の実践をする団体として専門性と非専門性を行き来する活動を地域側に作っていくことが役割であると思っています。

展望

Q）これからの展望はありますか？

目の前の生活に精一杯で、さらに楽しい体験やチャレンジなどが十分とは言えない子どもも多いので、さらにその面の充実を図りたいですね。そして本当は子どもたちと家庭がひろばの活動以外にも365日、24時間安心して暮らせる地域であり、そういった子どもたちを支えられる人が増えるといいなと思っています。

私たちがすることは基本的には変わらず、地域で一緒に暮らす延長線の中で、問題が深刻かどうかは関係なく、声をかけてもらえる組織でありたいです。子どもの貧困解決には公的な仕組みの充実や専門職の専門性が必要不可欠なため、そういった体制が強まっていくことも応援できたらいいなと思います。

そして子どもの大きなSOSだけではなく小さなSOSの段階から声を聞ける場であり続けたいし、そのような地域や社会にしていきたいと思います。そんなまちで暮らしながら子どもや家族と『一緒に考える』ということ続けていくひろばでありたいと思っています。

おわりに

新型コロナウィルス感染症の影響があった頃から比べると徐々に以前のような日常を取り戻したと感じる一年だったように思います。ここ数年間、社会環境・地域環境が目まぐるしく変わっていっても、子どもたちにとって変わらない「日常にある安心・安全」を確保する、維持することに注力し活動してきました。この1年間も皆様のおかげで、安心して子どもたちの変化を見届けること、一歩踏み出す勇気を応援することができたと感じております。

日頃、事業担当者として直接子どもたちと接している時間のほとんどは、ゲームをしたり、ご飯を食べたり、趣味の話をしたり、ごろごろして過ごすなど楽しい時間を共に過ごしています。しかし時折、子どもたちから「もうしんどいなぁ…」という思いを聞くことがあります。その思いの中には「家でずっと親からイライラをぶつけられているしんどさ」「毎日毎日、自分の時間より家族や他の人のために動かなければならないしんどさ」「どこに行っても自分の話を聞いてもらえない思いがあることのしんどさ」など、子どもたちの状況によって様々です。でも具体的にしんどさを人に話すことが難しかったり、子ども自身も分からなくて混乱していたりする結果としてたった一言、「しんどいな」と言葉に出てきます。その言葉から私たちは「何かあったかもしれない」と感じながらどうにかそれに応えてあげられないのかと試行錯誤をしながら日々活動しています。

そういったときは話を聞くことで子どもたちの気持ちを少しでも和らげることができたり、状況によっては各機関と連携をして課題の解決に向けて動いたりすることもあります。けれども子どもたち自身が「どうせ自分たちの環境はすぐに変わらない」ということを一番に思いながら日常生活を送っていることがほとんどだと感じています。

そうして社会の仕組みが変わっていかないことに対して、子どもたち自身が今の生活や、すでに今後の人生を諦めたかのような言葉を発した時に、周りの大人が「大丈夫、安心して。なにかあったら頼って」と自信を持って言える環境にはまだまだ遠いように思います。子どもの安心や安全が確保されない状況にあることに周りが気づけない、もしくは気づいていても対策を取ることができず、子どもたちの力のみを頼りにして生活している状況に歯痒い思いをもっている方も多いかと思います。

子どもである期間は18年という短い期間です。その期間でみなが当たり前に保証されているはずの「日常にある安心・安全」を保障する仕組みを作っていくために、これからも様々な方々とこの「子どもの貧困問題」について考えてもう一歩、次のステップへ進められるよう共に動いていきたいと思います。そして子どもたちが大人になった時に自立して楽しい生活できるようになっていってくれることを切に願いながらまた今年度も引き続き、皆様と共に活動を続けていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

子どもの貧困対策事業担当　福崎　由貴子